武士と毒薬

江連　泰知

人　物

羽佐間玄之進（６）１８）（２０）医師
楠部六右衛門（１６）（１８）用心棒
小桐雛丸（９）丈間藩藩主の子
小桐景光（４２）丈間藩藩主
羽佐間玄三（２８）士席医師
古井和可（３０）軽輩医師
新橋辰三（２７）町火消し
新橋辰吉（５）辰三の息子
町人Ａ
町人Ｂ

○鳥戸川・河原

曇天である。河原の砂利の上に三つの首が晒されており、その前に楠部六右衛門（１６）が蹲り、嗚咽しながら拳で地面を叩いている。町人達が遠巻きにそれを見ている。旅姿の羽佐間玄之進が（１８）町人達をかき分けて楠部の方へ進んでいる。羽佐間は全身に汗をかいている。

町人Ａ「謀反だってよ」

町人Ｂ「まあ怖い」

楠部「嘘だっ、嘘だ！」

羽佐間、町人達の中から出てきて、楠部の背後に立つ。楠部、泣きはらした目で羽佐間を見る。羽佐間、三つの内真ん中の首を見る。

羽佐間「父上」

羽佐間、拳を握り、震えながら唇を出血するまで噛み締める。羽佐間と楠部の上に雪が降ってくる。

○長屋・羽佐間家・内（朝）

整頓された一室。汗だくの羽佐間（２０）が布団で寝ている。羽佐間は唇を噛み締めており、噛んだところから出血している。戸を叩く音が響く。羽佐間、目をカッと見開いて飛び起きる。

羽佐間、荒い息で胸を押さえる。

雛丸の声「せんせー。なあ、せんせー」

羽佐間、戸の方に目を遣る。

雛丸の声「せんせー、起きてるー？」

羽佐間、唾を飲み込む。

羽佐間「今参る」

羽佐間、唇の血を手の甲で拭う。

○同・玄関・外

遠くに城が見える。小桐雛丸（９）が戸の前に立っている。戸が開いて羽佐間が現れる。雛丸、汗が染みた羽佐間の服と顔を交互に見る。

雛丸「どうしたの？」

羽佐間、虫を払うように手を振る。

羽佐間「何用だ？」

雛丸「辰三さんが呼んでるぜ」

羽佐間「め組の？」

雛丸の声「辰吉が熱出したって」

羽佐間「あいわかった。支度をする」

羽佐間、家の中に向かっていく。

雛丸「支度？見たいみたい！」

羽佐間、肩越しに雛丸を見る。

羽佐間「そこで待っていろ」

羽佐間、家の中に入る。

雛丸「いいだろ別にー？」

雛丸、家の中に入る。

雛丸の声「うえー、ほこっりぽい」

羽佐間の声「そうか？」

雛丸の咳が家の中から聞こえる。

○同・新橋家・内

火照った顔の新橋辰吉（５）が布団で横になっている。その傍らで羽佐間が

乳鉢で薬を砕いている。羽佐間の脇には水の入った湯飲み、ろ紙および薬箱が置かれている。雛丸が羽佐間の肩越しにすり鉢と子供を交互に見ている。

新橋辰三（２７）が羽佐間の背後で手を擦り合わせている。羽佐間、砕いた薬をろ紙に乗せて手に持つと、もう一方の手で辰吉を起き上がらせる。

羽佐間「苦いが、我慢できるな？」

辰吉、おどおどと羽佐間の顔を見る。

羽佐間「男（おのこ）であろう？」

辰吉、口を真一文字に結んで頷く。羽佐間、頷いて辰吉の口に薬を入れ、すぐさま湯飲みの水で流し込む。辰吉、眉間に皺を寄せて飲み込む。羽佐間、新橋に向き直る。

羽佐間「三日も休めば熱も取れましょう」

新橋「本当ですか！？ありがてえ！」

新橋、辰吉に近寄る。羽佐間がすり足で道を開け、新橋は辰吉を抱きしめる。

新橋「良かったなあ！辰吉ぃ！」
辰吉「苦しいよ、父ちゃん」
雛丸「ただの風邪だってのに、大袈裟だなあ」
羽佐間、新橋父子を見て目を細める。

○城下町・路上
羽佐間と雛丸が並んで歩いている。
羽佐間「ほう、殿様が？」
雛丸「そう！医者を探してんだって！」
羽佐間「しかし、既に藩医はいるだろう」
雛丸「腕のいい医者が欲しいって噂だぜ」
羽佐間、唇を噛む。
羽佐間「（小声で）勝手なものだ」
雛丸「先生も応募したら？」
羽佐間「いや、遠慮しておく」
雛丸「なんで？今より良い暮らしできるぜ？」
羽佐間「かもしれんな。だがその結果」
羽佐間と雛丸、角を曲がる。道の真ん中に晒し首がある。その脇に御触書があり、御触書の前に編み笠を目深に被

り、帯刀した楠部（１８）が立ち、刀を握りしめている。

羽佐間「首を狩られるようではかなわぬ」

羽佐間、晒し首を顎で指す。雛丸、晒し首を見る。

雛丸「ヒッ」

雛丸、苦し気にヒューヒューと息を吐く。羽佐間、雛丸の背を叩く。雛丸の呼吸が落ち着く。

羽佐間「大事ないか？」

雛丸「ちょっとびっくりしただけさ」

雛丸、羽佐間の陰に隠れつつ晒し首を見る。

雛丸「あの人たちはなんで？」

羽佐間「大方、謀反の嫌疑であろう」

雛丸「殿様に逆らおうとしたってこと？」

羽佐間「まことかどうかは知らぬがな」

雛丸、首を傾げる。楠部、抜刀して御触書を斬る。

楠部「外道が」

羽佐間、楠部の顔を覗き込み、目を見開く。

羽佐間「六右衛門？」

楠部、羽佐間を見て息を呑む。

楠部「玄之進殿か？」

楠部、編み笠を取る。

雛丸「え、知り合い？」

羽佐間、頷く。

羽佐間「古い、友だ」

楠部「二年ぶりだな」

羽佐間「ああ」

羽佐間と楠部、見つめ合う。雛丸、羽佐間と楠部を交互に見る。

〇長屋・羽佐間家・内（夜）

羽佐間と楠部が向かい合って座り、酒を酌み交わしている。楠部の顔は真赤である。

楠部「昼間の首を覚えているか？あれは」

羽佐間「戸塚殿だったな」

楠部、頷く。
楠部「小うるさいジジイだったが」
楠部、杯を一息に飲み干す。
楠部「藩のことは誰よりも考えていた」
楠部、杯に酒を注ぐ。
羽佐間「ああ、その通りだ」
楠部「謀反など起こすと思うか？」
羽佐間、眉間に皺を寄せて首を振る。
楠部「彼奴は変わらんのだな」
羽佐間「彼奴？」
楠部「小桐景光よ」
羽佐間「ああ」
楠部「我らの父を殺した時から何も変わらん」
楠部、拳を握る。
楠部「何故ああも」
羽佐間「彼奴は」
楠部「ん」
羽佐間「かつて主君を裏切ったことでこの地を手に入れた」
楠部「聞いたことがある。関ヶ原だったな？」

羽佐間、頷く。
羽佐間「故に、己もいつか足を掬われるので
はないかと恐れているのだ」
楠部「下らぬ」
楠部、床を殴る。
楠部「下らぬ猜疑心だ」
羽佐間、酒を一息に飲み干し、深々と
溜息をつく。
楠部「玄之進殿」
羽佐間「何だ？」
楠部「俺が何故帰ってきたか、話していなか
ったな」
羽佐間「言ってみろ」
楠部「仇を討ちに来た」
羽佐間、一瞬動きを止める。
羽佐間「無茶を申すな」
楠部「無茶でも構わぬ」
羽佐間「六右衛門」
楠部「あんたは悔しくないのか」
羽佐間、杯を持つ手に力を込める。

楠部「一方的に謀反人と断じられ、父上も、
あんたの父もっ」
羽佐間が持つ杯にひびが入る。楠部、
押し黙る。
羽佐間「悔しくないとでも思うたか」
楠部、唾を飲み込む。
楠部「ならば共に」
羽佐間「しかし」
楠部「このまま何もせず町医者を続ける気か」
羽佐間「それは」
楠部「俺は一人でも行くぞ」
羽佐間、手で楠部を制する。
羽佐間「一晩、考えさせてくれ」
楠部「玄之進殿」
羽佐間「今宵は泊っていくといい」
羽佐間、杯を置く。

○同・玄関・外（夜）
羽佐間が戸に寄りかかり、月明かりに
照らされる城を見ている。

○（回想）城・羽佐間家・寝室・内

顔に白い布を掛けられた女性の遺体が布団に寝かせられ、その脇に羽佐間玄三（２８）が座って肩を震わせている。

玄三の隣に羽佐間（６）が座ってすすり泣いている。

羽佐間「どうして」

玄三、羽佐間を見る。

羽佐間「母上は治らなかったのですか」

玄三「すまぬ、玄之進」

羽佐間「父上？」

玄三「私の医術が、知識が及ばなかったのだ」

羽佐間、女性の遺体を見つめる。

羽佐間「父上、私に医術を教えてください」

玄三「玄之進？」

羽佐間「私は、いかなる病も治せる藩医になります」

玄三、泣きながら微笑む。

玄三「そうじゃな、その意気じゃ」

羽佐間「だから」

羽佐間、玄三の袖を掴む。

羽佐間「父上は、死なないでください」

玄三「玄之進っ！」

羽佐間と玄三、抱き合って泣く。

○長屋・羽佐間家・玄関・外（夜）

羽佐間が戸に寄りかかり、月明かりに照らされる城を見ている。羽佐間の目が潤む。羽佐間、目を細めて涙を堪える。

○同・内（朝）

布団で楠部が寝ている。その脇に帯刀した羽佐間が座っている。羽佐間の背後に薬箱が置かれている。楠部、目覚めて羽佐間を見るなり飛び起きる。

楠部「玄之進殿！それは」

羽佐間「六右衛門、小桐を討つぞ」

楠部「おお！」

羽佐間「ただし！」

羽佐間、背後から薬箱を取り、楠部の前に置く。

羽佐間「無策ではならぬ」

楠部「何をするつもりだ？」

羽佐間「小桐は新たな藩医を探している」

楠部「そうなのか？では、あんたは」

羽佐間、頷く。

羽佐間「藩医として彼奴の城に潜り込む」

楠部「左様な手が」

羽佐間「然る後に私の手引きで城に乗り込み」

楠部「小桐を、討つ！」

羽佐間「応！」

羽佐間と楠部、力強く握手をする。朝日が部屋の中に差し込む。

○城・外観

城下町を見下ろす位置にある城。

○同・薬師の間・内

吹き抜けのある空間。血の気のない顔をした女官が座椅子に座っている。羽佐間がその脇で薬を乳鉢を使って砕いている。その隣に古井和可（３０）がおり、メモを取りながら羽佐間の様子を見ている。

小桐の声「あの者が藩医に志願を？」

羽佐間、吹き抜けの上部を見上げる。そこに小桐景光（４２）が現れる。羽佐間、薬を砕く手を止めて小桐を睨む。

羽佐間「（小声で）小桐景光」

羽佐間、乳棒を強く握る

古井「羽佐間殿？」

羽佐間、小桐から視線を逸らす。

羽佐間「失礼、続けます」

羽佐間、唇を噛み締めながら、先程より力強く薬を砕く。

○団子屋・店先・外

店先の椅子に羽佐間と雛丸が並んで座り、団子を食べている。

雛丸「明日お城に？」

羽佐間「薬が効いたか確かめてくる。まあ」

雛丸「まあ？」

羽佐間「効いてるとは思うがな」

雛丸「じゃあ藩医になれるんだ！？」

雛丸、満面の笑み。

羽佐間「決まったわけではない」

雛丸「楽しみだなー」

羽佐間「楽しみ？何がだ？」

羽佐間、団子を齧る。

雛丸「あー、実は」

雛丸、頭をポリポリ掻く。

羽佐間「ん？」

雛丸、ヒューヒューと呼吸し始める。

羽佐間「雛丸？」

雛丸、咳きこみ始める。

羽佐間「しっかりせい！」

羽佐間、雛丸の背を撫でる。雛丸の咳が収まる。

雛丸「ごめんごめん」

羽佐間「一体どうした」

雛丸「団子慌てて食いすぎた！」

雛丸、立ち上がる。羽佐間、顎に指を当てる。

羽佐間「しかし、お前、以前も」

雛丸「じゃ、またな！センセ！」

雛丸、走り去っていく。羽佐間、首を傾げた後団子を食べ尽くす。

○城・薬師の間・内

羽佐間と古井が向かい合って座っている。

羽佐間「しからば、病は無事に」

古井「うむ。妙技にございました」

羽佐間「いえ」

古井「是非、藩医としてお勤めいただきたい」

羽佐間「ありがたき幸せにございます」

羽佐間、平伏する。古井、何度も頷く。
古井「殿も大層お喜びになられましょうぞ」
羽佐間、平伏した体勢のまま床に爪を立てる。
羽佐間「小桐、様が」
古井、微笑んで頷く。古井、辺りを見回し、口元に手を当てて羽佐間に囁く。
古井「ここだけの話、ではございますが」
羽佐間「はっ」
古井「殿が新たな藩医を求めたのにはワケがあるのです」
羽佐間「ワケ？」
古井「殿のご子息ですが」
羽佐間「ええ」
古井「長いこと肺の病を患っておりましてな」
羽佐間「肺の？初耳ですな」
古井「殿の意向でご内密にと」
羽佐間「はあ」
古井「で、その病ですが近頃悪化してまして」
羽佐間「はっ」

古井「恥ずかしながら拙者には手に負えず」
羽佐間「治せる医者を探していると」
古井「ご明察」
羽佐間、自分の脚に爪を立てる。
羽佐間「左様でございますか」
古井、柔和な笑みを浮かべる。
古井「お仕えして初めて知ったのですが」
羽佐間の表情は引きつっている。
羽佐間「ええ」
古井「存外家族思いなお方でしてなあ」
羽佐間「家族、思い？」
古井「此度のことも、何をしてでも我が子の命を救ってくれと」
羽佐間「そう言ったのですか」
古井、頷く。羽佐間、俯いて唇を噛む。
噛んだところから血がにじむ。
羽佐間「家族の命を救ってくれと」
古井「ご期待に、応えてくださいませ」
羽佐間、より一層強く唇を噛み締める。
羽佐間「御意」

古井、目を閉じて何度も頷く。羽佐間の唇から床に血が垂れる。

羽佐間「では、これにて」

古井「左様で。送りましょうか？」

羽佐間「結構」

羽佐間、立ち上がって去る。古井、床に残された血痕を見て首を傾げる。

○長屋・羽佐間家・玄関・外（夕）

編み笠を被った楠部が戸の脇の壁にもたれかかっている。いかり肩の羽佐間が唇を噛みながら歩いてくる。

楠部「玄之進殿、どうであった？」

羽佐間、黙って戸を開けて家の中に入る。楠部、怪訝な顔でそれを追って家の中へ入る。

○同・内（夕）

羽佐間が家の中に入ってくる。家には夕陽が差し込んでいる。家の奥には薬

箱とその隣に黒い小箱がある。次いで楠部も入ってくる。羽佐間、床に拳を打ち付ける。

羽佐間「あの、外道がっ！」

楠部「玄之進殿！？」

楠部、羽佐間に駆け寄る。

楠部「何があった？」

羽佐間「彼奴が医者を求める理由がわかった」

楠部「なんだ？」

羽佐間「倅の病を治すためと」

楠部「そうであったのか」

羽佐間「彼奴は、私の、いや私達の家族の命を奪っておきながら、己の家族の命は惜しいのだっ！」

羽佐間、再び拳を床に打ち付け、蹲って震える。楠部、刀を握りしめる。羽佐間、ふらふらと立ち上がって部屋の奥へ行く。

羽佐間「六右衛門」

楠部「何だ？」

羽佐間「私は、医の道を捨てる」
楠部「どういうことだ？」
羽佐間、部屋の奥の小箱を手に取る。
羽佐間「これを彼奴の子に」
羽佐間が小箱を開けると乾燥したトリカブトが出てくる。
楠部「それは？」
羽佐間「附子（ぶし）、用法次第で猛毒となる」
楠部、目を丸くする。
楠部「では、彼奴の子を殺すと」
羽佐間「彼奴にも、家族を奪われる苦しみを教えてやらねば気が済まん！」
楠部、目を閉じ、頷く。
楠部「いいだろう、その策、乗った」
羽佐間「六右衛門」
楠部「我らと同じ苦しみを、然る後に討つ！」
羽佐間「応！」
羽佐間と楠部、見つめ合う。家の中に差し込んでいた夕日が消え、暗くなる。

○城・外観

曇天である。

古井の声「羽佐間殿！」

○同・門・内

薬箱を持った羽佐間が立っている。隣に楠部もいる。そこへ古井が駆けつけてくる。

古井「ちょうどいいところに！こちらは？」

古井、楠部を見る。

羽佐間「私の助手です」

楠部、無言でお辞儀する。古井、お辞儀を返す。

羽佐間「それより古井殿、いかがした？」

古井「ああ！ご子息様の病が」

古井、首を振る。

古井「とにかく、来てくだされ！」

古井、歩き出す。羽佐間と楠部、それについていく。羽佐間、薬箱に手を当て、唾を飲み込む。

○同・廊下

古井が早足で歩いており、その後ろを薬箱を持った羽佐間、次いで楠部がついていっている。

羽佐間「つまり、咳が止まらぬと？」

古井「ええ、どう見ます？」

羽佐間「ただちに薬を飲ませねば」

古井「飲ませねば？」

羽佐間「長くは、ないでしょうな」

古井、悲鳴を上げる。

羽佐間「殿はどちらに？」

古井「鷹狩の最中でして」

羽佐間「鷹狩？」

古井「伝令をやったので、すぐ戻られるかと」

羽佐間と楠部、目配せをしあう。楠部、音を立てずに二人の後ろから去る。

○同・雛丸の部屋・外

古井と、薬箱を持った羽佐間が襖の前に立っている。部屋の中から雛丸が咳きこむ音が聞こえてくる。

羽佐間「ここに？」

古井、頷く。

古井「どうかお願いいたします」

羽佐間「承知」

古井「拙者も」

羽佐間「いえ、古井殿は殿をお迎えに」

古井「えっ」

羽佐間「では」

羽佐間、襖を開け、部屋に入っていく。

○同・内

雛丸が布団で寝ながら咳きこんでいる。薬箱を持った羽佐間が部屋に入ってくる。羽佐間、雛丸の方を見ないようにしながら、雛丸の側に座る。羽佐間、薬箱を開け、中から黒い小箱を取り出す。

○同・廊下

小桐と古井が早足で歩いている。

小桐「まこと治るのであろうな！」

古井「羽佐間殿を信じるしか」

小桐と古井、曲がり角に差し掛かる。

曲がり角の奥から気絶した武士が倒れてくる。小桐と古井、立ち止まって目を見開く。

楠部の声「久しいな」

曲がり角の奥から楠部が現れる。

楠部「俺を覚えているかっ、小桐景光！」

楠部、刀を握る。

○同・雛丸の部屋・内

雛丸が布団で寝ながら咳きこんでいる。

その脇に羽佐間がおり、羽佐間の横に薬箱、乳鉢と乳棒が置かれている。

羽佐間、手に持った黒い小箱から乾燥トリカブトを取り出し、乳鉢に入れる。

羽佐間「恨むなら、外道の父を」
羽佐間、雛丸の顔を見て目を見開く。
羽佐間「雛丸？」
雛丸、咳きこみながらも羽佐間の顔を見て、笑みを浮かべる。

○同・廊下
刀を握った楠部が小桐と古井に向かい合っている。
小桐「楠部の倅か」
楠部「然り」
小桐「退け！我が子が病に苦しんでおるのだ」
楠部「ふざけるなっ！」
楠部、小桐の腕を切りつける。小桐、血の流れる腕を押さえて蹲る。
楠部「俺も玄之進殿も父の死に目に会えなかったのだ！貴様だけのうのうと！」
古井「玄之進？」
古井、口元を押さえる。楠部、ニヤリと笑う。

楠部「そうだ。羽佐間玄之進は我が同志也！」
小桐「あの医者が羽佐間の倅？」
楠部「貴様にも教えてやる」
楠部、刀を小桐に突き付ける。
楠部「家族を失う恐怖と苦しみを！」
楠部、冷や汗を流す。

○同・雛丸の部屋・内
布団で寝ながら咳きこむ雛丸が羽佐間を見ている。乾燥トリカブトと乳棒の入った乳鉢を持つ羽佐間が、その脇に座って雛丸を見ている。羽佐間の隣には薬箱と黒い小箱が置かれている。
羽佐間「お前、小桐の倅だったのか」
雛丸、咳きこみながら頷く。
羽佐間「どうして城下に」
羽佐間、首を振る。
羽佐間「左様なことより」
羽佐間、乾燥トリカブトを見ながら震える。

○同・廊下

腕を怪我した小桐、楠部に土下座している。古井がその脇に立ち、おろおろしている。楠部、震えながら小桐に刀を突きつけている。

小桐「頼む、雛丸の命だけは」

楠部「ならぬ！」

古井「そ、そんな」

楠部「かつて俺も父の助命を願った」

小桐、ビクンと身を震わせる。

楠部「それを貴様は一蹴したではないか」

小桐、泣き始める。

○同・雛丸の部屋・内

雛丸が布団で寝ながら咳きこむ。その脇で羽佐間が乳鉢で乾燥トリカブトを砕いている。羽佐間の脇には薬箱と黒い小箱が置かれている。

○同・廊下

腕を怪我した小桐、楠部に土下座している。古井がその脇に立ち、おろおろしている。楠部、小桐に刀を突きつけながらも視線を逸らしている。

楠部「それに、もう遅い、今頃」

小桐、顔を上げる。楠部、深呼吸する。

楠部「貴様の子は、附子の毒を飲まされてる」

小桐、頭を抱える。

○同・雛丸の部屋・内

羽佐間、布団に入った雛丸の上半身を起こし、ろ紙で薬を飲ませている。

○同・外

襖の前に腕を怪我した小桐と古井が立っている。楠部がその背後に立ち、小桐に刀を突きつけている。

楠部「入れ」

小桐、楠部を振り返る。

楠部「我が子の死に顔を見た後、斬ってやる」

小桐、襖に向き直り、襖を開ける。

○同・内

布団で横になる雛丸の顔に、白い布が掛けられている。その脇に羽佐間が座っている。羽佐間の横には薬箱と黒い小箱が置かれている。襖があいて小桐と古井が入ってくる。次いで刀を構えた楠部が入ってくる。

小桐「あ、ああ、雛丸」

小桐、崩れ落ちる。楠部、雛丸から目を逸らす。羽佐間、小桐に背を向けたまま言う。

羽佐間「それが、家族を失うということだ」

羽佐間、小桐の方を向く。

羽佐間「お前はその底なしの悲しみを、私や、六右衛門、そしてお前がつまらぬ猜疑心から殺した全ての人々の家族に味わわせてきたのだ」

小桐、呻いて蹲る。

小桐「すまなかった、すまなかった」

楠部、雛丸を見て項垂れる。羽佐間、雛丸の顔に掛かった布を取る。雛丸は涙を流している。

楠部「なっ、涙を！？」

楠部、小桐、顔を上げる。

小桐「雛丸！」

小桐、雛丸に駆け寄る。

雛丸「父上」

小桐「生きておる、雛丸が、生きておる」

小桐、雛丸を抱きしめて泣く。楠部、呆然とそれを見る。羽佐間、薬箱を開けてメモが書かれた紙を取り出して立ち上がる。

羽佐間「附子は処理次第で薬の材料にもなる」

羽佐間、紙を古井に渡す。

羽佐間「三日に一度、この薬を飲ませよ」

古井、紙を受け取って大きく頷く。羽佐間、部屋の入口に立つ楠部に向かい、

すれ違いざまに言う。

羽佐間「すまぬ」

羽佐間、部屋から出ていく。六右衛門、力なく刀を下ろす。

○城・外観

雪が積もっている。

○城・二の丸・首塚

雪が積もっている。石の積みあがった首塚がある。石は一つ一つ手書きで経文が書かれている。雛丸が経文の書かれた石を手にその前に立っている。羽佐間がその背後に立っている。

羽佐間「この下には」

雛丸、羽佐間を振り返る。

羽佐間「私や、六右衛門の父が眠っている」

雛丸「うん」

羽佐間「祈ってやってくれ」

雛丸、頷いて手に持った石を首塚に加え、合掌する。羽佐間、天を仰ぐ。

○同・門前・外

積雪に日差しが射している。門に、編み笠を被った楠部が寄りかかっている。門の中から羽佐間と雛丸が並んで出てくる。雛丸、楠部を見て手を伸ばす。

雛丸「あの」

羽佐間、雛丸の手を掴んで首を振る。雛丸、手を引っ込めて再び歩き出す。羽佐間、楠部を一瞥した後、雛丸に続いて歩き出す。楠部、編み笠を深くかぶり直し、一筋の涙を流す。積雪が解け始めている。